

一つの注文

川 副 詔 三（東京都／元東芝アンベックス闘争と連帯する会事務局）

私としては、本誌にこの稿を送りたくない、という気持ちです。しかし、編集者の電話のさいそくに押されて、ペンをとったしだいです。

私は協同組合人ではなく、労働運動家にすぎません。思想的にはマルクスが種をまいた社会科学の理論に立脚しているつもりです。協同組合運動・思想（以下、『協同』と略します。）に関心を寄せているのは、マルクスの社会主義・労働運動の思想と実践が歴史の試練に直面し、再検討・再構築を迫られていると考えているからです。協同組合運動・思想から、この点で何かしらを学びとれたらと考えています。

社会運動・思想としては『協同』と私たちとは、その究極の目標・課題においても、また、資本主義社会への批判においても、多くの点で共通していると感じます。とくに、現存する資本主義批判と究極目標の鮮明な提起に成功していながらも、それを実現していく方法・道すじについては、論理次元はともかく、実践的解答という次元では、まだ、模索と探究を必要としているという共通性には親近感と共感をおぼえました。いわば、未完の共同探求者とも言うべき、共通性は大切だと思います。『協同』は資本（企業）の外部に別のセクターを創造し、目標達成をめざしているのに対して、私たちは資本（企業）の内部から改革・変革を追求します。この「場」と手段の求め方の相違は当然のこととして、闘いの過程で習得・蓄積されていく社会運動上の諸能力・技法に質的相違をもたらしています。この相違ゆえに『協同』と私たちとの相互学習・相互研鑽・相互協力は一層有益なものと感じています。

ところが、本来であれば、上述のごとく、相互学習・相互研鑽が最も必要とされ、有益でもあるはずの、東芝アンベックス労働組合（タウ技研）においては、いまのところ必ずしも、その点で成

功していません。御存知の通り、東芝アンベックス労働組合は倒産争議に勝利して、経営を担うことになりました。現時点では組合員の一部には『協同』に対する一種の反発さえあります。なぜそうなったかの原因は多種・多様ですから、すべてを述べることはできません。そこで、必ずしも、最も大切で大きな理由というわけではないのですが、『協同』の文献に目を通したり、集会に参加したりして、労働運動家として気になる一点についてだけ触れさせていただきます。

それは、労働運動から協同組合に転身した指導者の場合にしばしば見つけるのですが、労働組合に対する、清算主義的・否定的言動が不用意になされることです。私たちのように、労働組合として、経営に責任を担おうとする者たちにとっては、その種の言動は、重大な障害になりかねません。とくに、ごく普通の労働者の場合（思想とか理論に生きる活動家は別ですが）長期の苦悩に満ちた争議を実生活としているのですから、そうした組合員生活への清算主義的・否定的言動がおよぼすマイナスは、非常に大きなものがあります。

私は、私たちと『協同』との相互研鑽・相互協力の前進に意を用いている運動家ですが、その前進の見地からすると、上述の不用意な言動の発生源が、単に、配慮の不足という技術的要因の場合には大目に見ることが可能なのですが、そうではなく、お互いが相手の思想と運動を浅くしか理解できていないことにある場合については軽視することができないと感じています。

私たちの、現段階での問題性がみなさん方と私たちとのより深く、より全面的な相互理解の前進につながることを願ってやみません。